

鬼討債説話の成立と展開

——我が子が債鬼であることの発見——

福田素子

はじめに

鬼討債とは、中国怪談の一類型で、「借金を踏み倒されたまま死んだ人間が踏み倒した人間の子に転生し、浪費することによって借金を取り返す」という物語である。

幽霊とは一般に、不本意に死んだ者が現世にさまよい出て来るものである。その原因が誰かに対する怨恨であれば、憎い相手を恐怖させ、挙句に命をとるということになる。しかしこの鬼討債説話に出てくる「鬼」、すなわち中国の幽霊が行う復讐はそのようにストレートなものではない。

この説話において、友人の借金を踏み倒し、更に死においやつた者は、一旦子を授かった喜びを味わう。ところがやがて、その子の病氣や行状に一喜一憂する毎日がやつてくる。子供の命を延ばすために、または子供の浪費によって、金は飛ぶように無くなっていく。そして最後の瞬間、子供は言う。私は貴方の子ではなく、貴方に金を奪われ、死に追いやられた者に過ぎない。子供への愛によって惜しみなく金を費やすという行為は、借金を返すという経済行為でしかなかった。このとき、親は子供の肉体を失うだけでなく、子供との過去の記憶までも汚され、ひとり取り残されるので

ある。「孝」ということを何よりも重んじる社会で、このような皮肉な説話が語り継がれてきた不思議を思わざるを得ない。

鬼討債という物語がある社会において成立するためには、いくつかの条件が必要である。一つは、すべてのモノや労働が貨幣という一つのものさしによつてはかることが出来るようになることである。もう一つは、輪廻転生が中国的に理解されることである。インドの本生譚では、人は輪廻を操ることは出来ないし、前世のことを自力で思い出すことも出来ない。ところが中国では死人が来世にどのように生まれ変わるかを自ら選べ、転生後も前世のことを思い出すことが出来るのである。つまり鬼討債故事の成立と展開は、貨幣経済と仏教の中国化の様態を知る上でも重要な鍵となるのである。

本論文では、唐代における鬼討債説話『玄怪録』（唐・牛僧孺）所収の「党氏女」及びその系統の作品と、『集異記』（唐・薛用弱）所収の「阿足師」及びその系統の作品を取り上げ、この二系統の作品が後代の鬼討債説話にいかに関与され、受容されたかを考察する。

「鬼討債」は、「鬼索債」とも言うが、ネイティブ・スピーカーによると、現在の中国では「鬼討債」が一般的であるという。また、『漢語大詞典』にも「討債鬼」という単語は出ているが「索債」や「索債鬼」は出ていない。本論文中でも引用以外は「鬼討債（亡霊による借金の取立て）」という語を用い、このような行為をする亡霊を「討債鬼」と呼ぶこととする。

一、宋代以降の鬼討債説話

唐代の鬼討債説話について論じる前に、比較的よく知られている宋代以降の鬼討債説話について概観したい。

宋代以降の筆記小説における鬼討債説話の研究のまとめたものとしては、澤田瑞穂『鬼趣談義』⁽¹⁾中の「鬼索債」の

章がある。ここでは宋・清の筆記小説における多くの実例が挙げられており、その起源については、借金を踏み倒される側に仏僧が多く登場することに注目し、仏僧による語り物にあるのではないかと推測している。また、永尾龍造『支那民俗誌』や文彦生『中国鬼話』⁽³⁾では民俗学的な研究が行われている。

澤田の前掲書は、『夷堅志』（宋・洪邁）と『睽車志』（宋・郭彖）に収録される宋代の鬼討債説話を紹介し、清代については『聊齋志異』をはじめ十七例、民話については三十年代の民話研究家林蘭の収集一例を挙げている。⁽⁴⁾更に類作を探すと、清代には『子不語』（清・袁枚）の「悪鬼嚇詐不遂（討債鬼を騙る鬼）」⁽⁵⁾のように、通りすがりの幽鬼が有りもしない前世の恨みをでっち上げて金をせしめようとするという、パロディ的な作品さえ生み出されている。二十世紀に入ると、近代的な民俗学の導入により、民間で語られていた鬼討債説話が収集されるようになる。先に挙げた林蘭の収集例の他、九十年代の『中国鬼話』⁽⁶⁾にも複数の例が収められている。これら民話の中の討債鬼は、かつて人間であったものというよりは、ほとんど妖怪に近いものが多い。討債鬼に関する民話は、雲南などからも報告されており、この説話が漢族居住圏の周縁部にまで及んでいることが分かる。また、永尾龍造も『支那民俗誌』⁽⁷⁾第六巻において、討債鬼にまつわる様々な習俗を紹介している。

現代小説の例では、張愛玲が一九四四年に発表した『桂花蒸 阿小悲秋』⁽⁸⁾において主人公阿小が自分の息子を叱る時の、「様様要人服侍！你一个月給我多少工錢，我服侍你？前世不知缺了你什麼債！（何でもかんでも人にさせて！お前は一体私にいくら月給をくれて世話してくれていうのさ！前世でお前にどんな借金があったっていうんだらうね！）」という台詞が、当時の鬼討債説話受容を示している。（数人のネイティブ・スピーカーより、これに類する罵倒表現が現在もあることをご教示頂いた。）李碧華『凌遲』⁽⁹⁾は、香港の企業家と、彼を破滅させる覚醒剤中毒の息子の関係が、実は前世の敵同士（死刑執行人と彼によって処刑される太平天国の一員）であったという内容で、金銭の貸し借りは無いが、前世の恨みを子に生まれ変わって晴らすというものであり、鬼討債説話の枠組みが利用されている。この

ような作品が書かれ、読まれるということは鬼討債説話が未だに広く一般に浸透していることを示しているだろう。

筆記小説の鬼討債説話においては、子供が討債鬼であることは、誕生直前の夢で告げられるか、又は子供の死の直前に子供の口から告げられる。また、親が現世や前世で金を借りた相手は、言及がある場合は当時の友人であることが多く、職業的な金貸しが出て来る話は未見である。そして問題の金額が往々にして具体的に提示され、取立て額と子のために費やした額がぴたり合うことが不気味さをもし出すひとつの要素となっている。

代表的な作品として、『聊齋志異』（清・蒲松齡）巻二「四十千」を挙げる。

新城王大司馬有主計僕、家称素封。忽夢一人奔入、曰「汝欠四十千、今宜還矣。」問之不答、径入内去。既醒、妻産男。知為夙孽、遂以四十千捆置一室、凡兒衣食病藥皆取給焉。過三四歲、視室中錢僅存七百。適乳姥抱兒至、調笑于側、僕呼之曰「四十千將尽、汝宜行矣！」言已、兒忽顔色變、項折目張。再撫之、氣已絶矣。乃以余資置葬具而瘞之。此可為負欠者戒也。…略…（新城の王大司馬のところに居た主計僕は、官職についてはいないが金持ちだった。夢の中で、突然人がひとり飛び込んできて「お前は四十千の金を借りっぱなしだぞ、今すぐ返せ」といった。どういうことかと質問したが、答えずにまっすぐ中に入ってしまった。夢から覚めると、妻が男児を産んだ。僕はこの子が前世の悪因縁だと知ったので、四十千の金を一室に一まとめにしておき、その子供の衣食住や薬代を皆そこから出させた。三歳か四歳を過ぎたころ、部屋の中の錢を見ると、わずか七百に減っていた。乳母が子を抱えているのに会ったので、からかいながら寄って行った。僕が子に向かって言った。「四十千はもう無くなるよ。もうそろそろ行ってしまう頃だろう。」言い終わると、子の顔色が突然変わり、首がぐくつと折れて目を剥いた。再びこれを撫でみると、既に息絶えていた。残っていた金で葬式を出し、埋葬した。これは借金を返さないものへの戒めであるといえよう。…略…）

二、唐代の鬼討債説話

盛唐期以前の鬼討債説話は、筆者もまだ見つけることが出来ていない。『太平広記』卷三三「甄法崇」(出『渚宮旧事』¹⁰)は劉宋の頃の話で、亡霊が借金を取り返しに来るものであるが、借金を踏み倒されたまま死んだ者は、転生せず幽霊として江陵県令甄法崇の前に出現し、踏み倒した者を告発して、自分の遺族に返済させるよう訴えるのである。この話と後世の討債鬼説話の相違点には、転生という要素が存在しないほかに、金を取り返す目的の違いがある。「甄法崇」の場合、目的はあくまでも自分の遺族が金を有効に使える状態にすることであって、金を返さなかった人間に対する復讐は二の次である。しかし鬼討債説話では、子の放蕩のために、あるいは子の病氣治療のために、金はひたすら消費される。討債鬼の目的は、金を取り返すことではなく、仇敵の金を失わせ、不幸にすることである。

子供に転生して借財の額だけ使い果たす討債鬼の説話は、中唐期になってようやく出現し、これらは大きく二つの系統に分けることが出来る。一つは『玄怪録』(唐・牛僧孺)卷二「党氏女」¹¹とその関連作品であり、もう一つは『集異記』(唐・薛用弱)佚文「阿足師」とその関連作品である。どちらも、加害者の子供に転生して復讐する顛末を描いている。まずはこれらの作品と宋代以降の鬼討債との相違点や、作品の生まれた背景について考察する。

1-1 「党氏女」型説話について

「党氏女」は、唐代の作品ながら『太平広記』には収録されておらず、現存する唯一の『玄怪録』単刻本である北京大学図書館所蔵の陳应翔刻四卷本『幽怪録』にのみ収められている。「玄」が「幽」に置き換えられているのは宋代の避諱による。この刻本の発見者である程毅中は、『玄怪録 続玄怪録』¹²の校点説明において、これは南宋本をもとにして作られた明本であるとしている。また同氏は、「党氏女」の成立時期(八三二より後)が牛僧孺(八四八没)の老年期

にあたり、『玄怪録』の推定成立年代より新しいこと、『夷堅志』補卷六の「王蘭玉童」でこの作品が『続玄怪録』所収の作品とされていることから、これが李復言『続玄怪録』から『玄怪録』に混入した可能性をも示唆している。次にその原文と翻訳（梗概のみ）を示す。

党氏女、同州韓城縣芝川南村人也。先是、有蘭如寶者、舍於芝川。元和初、客有王蘭者、以錢數百萬鬻茗、止其家積數年、無親友之來者、一旦臥疾、如寶以其無後患也、殺之。服饌車輿僕使之盛、擬於公侯。其年生一男、美而慧、雖孔融、衡玠之為奇、猶未可為比。其家念之、謂驪珠趙璧未敵、名曰玉童。衣食之用、日可數金。其或不欲、舞神拜仏之費、一日而罄、不顧也。既而漸大、輕裘肥馬、恣其出入。於是交遊少年、歌樓酒肆、悅音恣博、日不暫息、雖狂徒皆伏其豪。然而孳產稍衰、稼或不登、即乞貸望歲。元和十年、玉童暴卒、父母之哀、哭玠之不若也。号哭之声、感動行路、恨不得自身代之。如寶極困成瘵。其所飾終之具、泊捨財梵侶、仏画蓮宮、致席命案之費、若不以家為者。雖喪畢、每忌日、飯僧施財而追泣焉。自是稍稍致貧、如旧日矣。太和三年秋、有僧玄照、求食於党氏家。有女子年十三四、映門曰「母兄皆出、不得具饌。此北數里芝川店、有蘭氏者、亡子忌日、方當飯僧。師到必喜、盍往焉。」僧曰、「女非出入村市之人、何以知此而給我也。」女笑曰「其亡子即我之前身耳。」照大異之、問其所以、不對而入。照於是造蘭氏之門、入巷而見其広幕崇筵、及門人者喜照之來、揖之而入。既卒食、如寶哀不自勝。照曰「掌人念亡子若此、要見其今身乎。」如寶大驚、乃問之、照具以告。如寶遽適党氏、請見之。父母以告、女不肯出。如寶益聲躍、独念不以其母來、且無藉手、此所以不出也。遂婦。明日、與其妻偕、携蜀紅二十匹為請見之資。女納紅、復不肯出。如寶求其父母万辭、父母以如寶之懇也、入謂女曰「汝既不欲見、不當言之、既言而蘭叟若此之請、安得不強見。」女不復語。父母曰「必不見、則何辭。」女曰「第告之、何必相見。但云、『其子身存及沒、多岐所費、王蘭之財尽未。』聞此、必不求矣。」父母出、以告、如寶顧其妻、無言而退。既出、父母問其故、女曰「児前身若客王蘭也、有錢數百萬、客其家。元和初、頭眩而臥、遂為如寶所殺而取

其財、因而巨富。某既死而訴於上帝、上帝召問欲何以報、蘭言願為子以耗之、故委蛻焉。耗之且尽而死。近與之計、唯十環未足、故有蜀紅之贈。而今而後、如寶不復念其子而齋罷爾。韓城有趙子良者、嘗貫茗五束、未酬而蘭死。今當以其直求為婦、幣足而某去耳。亦不為婦也。」俄而媒氏言、子良之子納幣焉。親迎之期、約在歲首。既畢納而失女、父母懼子良之責也、偽哭而徙葬焉。…略…太和壬子歲、通王府功曹趙遵約言。（元和の初め（八〇六）、王蘭という裕福な茶商人が、同州韓城県芝川村の蘭如寶という者の客となっていた。王蘭の病臥に乗じて蘭如寶は身寄りの無い彼を殺し、その財産を奪つて贅沢な暮らしをするようになった。）

その年、蘭如寶は男の子に恵まれ、玉童と名づけた。その子は大変可愛く、かつ聡明であつたが、贅沢に育てたために大変な放蕩児となつた。元和十年（八一五）に玉童が急死した時には、蘭の財産は傾きかけていたが、葬式やその後の法要には金に糸目をつけなかつた。

太和三年（八二九）、玄照という僧が隣村の党氏の家で食を乞うた。するとその家の娘が出てきて、この家ではなく、芝川店の蘭氏の家に行けば、彼らの亡児の為の施しが行われていると教えた。玄照が不審がると、自分が亡児の生まれ変わりであると言つて奥に入った。

玄照が言われた通り隣村に行くと、果して蘭氏が施しをしていた。玄照は蘭氏に同情して、先ほどの娘の事を彼に告げた。蘭如寶は早速党氏の家に駆けつけたが、娘は会おうとしない。翌日妻とともに蜀の錦二十匹を携えて訪れたが、錦だけを受け取つて、やはり会おうとしない。党氏の両親が娘に事情を聞くと、「その子（玉童）が生まれて死ぬまでさぞかし物入りだったでしょうね。王蘭の財産は使い果たしたことでしょね」と伝言させた。すると蘭氏夫妻は黙つて帰つて行つた。

その後、娘は党氏夫妻に自分が前々世では茶商人王蘭であり、蘭氏に殺され、財を奪われたこと、上帝に訴えて蘭氏の子玉童に転生し、財産を使い尽くし、先ほどの錦の代金で清算が成つたこと、別に韓城の趙子良という人が居て、茶

の仕入れの金をまだ王蘭に払って居ないので、結納の金でもって償わせることを話した。するとたちまち仲人の言があり、子良の子が結納を持ってきて、婚礼の期日が定められた。結納が終わると娘は居なくなり、父母は子良に責められるのを恐れて葬式をした。…略…以上は太和六年（八三二）、通王府の功曹（官名）である趙遵約が語ったことである。

このように「党氏女」は奪われた金額を、きっちりその額だけ放蕩や医業の費えで取り返すという点で討債鬼の要件を満たしているだけでなく、別口の売掛金をも同じような方法で回収している。非常に入り組んだ復讐劇であり、末尾に「通王府の功曹趙遵約が語った」とあるが、娘とその父母が密室で交わす会話まで記録されており、噂を聞いてそのまま書いたとは思えない作品である。

李劍国の『唐五代志怪伝奇叙録』⁽¹³⁾は「党氏女」の類作として、『逸史』⁽¹⁴⁾逸文の「盧叔倫女」（『太平広記』卷一二五）と『夷堅志』補卷六「王蘭玉童」を挙げている。「盧叔倫女」は、初めに僧と謎めいたことを言う少女の出会いを置き、後半で娘の語りによって、前世の因縁を解き明かす、という複雑な構造になっている。宋代の『夷堅志』補卷六「王蘭玉童」は、殺された商人及びその転生した子供の名前は「党氏女」と同じであるが、商人の死の経緯や、一人の人間が同時に男女二人に転生・分身する点が「党氏女」と少々違っている。又、商人が子供に転生してまで借金を取り返すことの理由付けとして、生前に吝嗇であったことを強調したり、家族に知られない場所で死ぬ理由について、妻に女遊びがばれるのを懼れて行動を秘密にしたためであるとしたり、煩瑣な説明が多い。

「党氏女」・「盧叔倫女」・「王蘭玉童」は、細部や記述の順番に違いはあるが、「係累の無い泊り客を殺害して金を奪う」・「被害者が加害者の子供で夭折する男児と、加害者を遠くからうかがう女兒の二つの人格に転生する」・「被害者は冥府での話し合いを経て加害者の子に転生する」・「通りすがりの僧が転生した女兒と会話を交わすことによって前世の因縁が解き明かされる」という多くの共通点をそなえており、このことから「盧叔倫女」と「王蘭玉童」はいずれも

「党氏女」の直接の模倣作と見てよいだろう。

この三話の影響を強く受けていると見られるものの、また違った筋立てになっている小説に、『夷堅支戊』巻四所収の「呉雲郎」と『夷堅志』補卷六所収の「周翁父子」⁽¹⁵⁾がある。

「呉雲郎」では、呉沢という男がたまたま同宿した少年を殺して金を奪い、その後子をもうけるが、その子は若死にする。その翌年、沢の弟が湖のほとりで子の亡霊に遭遇する。叔父は亡霊の懇願を受けて沢を湖に連れて来るが、子の亡霊はしおらしいことを言つて父を油断させたかと思うと、前世の恨みを叫んで湖中に引きずり込むのである。父が行きずりの者を殺す点、殺された者が仇の子に転生する筈、父の弟という第三者がメッセンジャーに使われている点に「党氏女」系の影響を見ることが出来る。

「周翁父子」は、船頭周翁が、客となった身寄りの無い商人を殺し、財を奪うことが全ての発端になっている点、死者が冥土の役所と話し合いをして仇敵の子供に転生する点に「党氏女」系統の諸作品と共通するところがある。だが、名裁判官が介入し、奪った金額で度牒を贖い討債鬼を出家させることによって父子の関係を穏便に絶ち切つて終わる。これらの二作品は、「党氏女」系統説話のパターンから逸脱して自由に展開し、新しい物語が生み出されていく中間点にあるといえるだろう。『夷堅志』には更に、後世の鬼討債説話と同じように、子供が死ぬ間際にみずから因果の解き明かしをおこなう、「徐輝仲」(補卷六)のようなシンプルな形の鬼討債説話も収められている。

永嘉の徐輝仲は丹陽に行き、博労の親方から錢束千本を借りた。返さないうちに親方が死んだ上、証文がなかったの
で徐は何も言わないで帰った。後に子が一人生まれ、大変賢かったが八歳で病氣になり、父母は大変憂えて医者や薬に
数え切れないほど金を使った。病氣の子が親しくしている尼の温師にふとこう語った。「私はもう帰るよ。」尼は怪しん
で尋ねた。「お父さんお母さんがこんなに悲しんでいるのに、何故帰るなんて言うの？」すると答えた。「私は丹陽の人

間で、昔徐さんに私の金百万銭を貸したのです。私が死んだのをいいことに返さなかったので、取り返しに来たのです。もう満額になりましたら、帰ります。」言い終わると直ぐに死んだ。輝仲の孫娘が朱亨甫の子の嫁になって、この話をした（原文略）。

「徐輝仲」では子供が死に際に自ら名乗ることによって転生が一回で済むようになっており、後に一般的となるパターンが確立されている。『夷堅志』は鬼討債説話が「党氏女」型から後世『聊齋志異』などの典型的な鬼討債説話に変化していく過程を含む作品集であると言えるだろう。これ以降、この新しい型の鬼討債説話が量産されていくのである。

1-2 「党氏女」型説話と宋代以降の鬼討債説話との比較

「党氏女」型説話と、後の鬼討債説話の大きな違いに、生まれ変わりの回数と、正体を現世の人間に伝える方法とがある。「党氏女」型説話では、「自分が殺された商人の生まれ変わりである」ということを公にするためだけにもう一度転生しなければならない。また、もとの父母を自らのもとに呼び寄せる為の第三者（乞食僧や叔父）や、転生について説明する為の天帝などの登場人物が必要となる。しかし、宋代以降の説話の場合、討債鬼は「四十千」の例のように生まれる間際に夢にあらわれるか、「徐輝仲」のように死に際に正体をあらわすかすることによって親に直接正体を明かし、転生の回数と登場人物の数を省いている。このことによって物語はより簡素化し、洗練の度を加えていくのである。「党氏女」系統の作品がいずれも長大なのに対して、冒頭の「四十千」や「徐輝仲」はその半分ほどの長さしかない。中国の小説史では、一般に改作を重ねるうちに筋立てが複雑になり、登場人物もふえていくことが多いが、鬼討債説話においては、複雑から簡素へという特異な発展をとげているのである。

「周翁父子」を含む「党氏女」型説話では、たまたま自分の店の客となったり、同宿したりした赤の他人から金を奪うことになっている。しかし宋・清代の筆記小説の場合、前世の人間関係については全く説明が無いが、又は「徐輝仲」

の場合のように、仲間が信頼して貸してくれた金を踏み倒すことに変わってくる。元来赤の他人に殺されたのであれば、ただ単に残酷な方法で命を奪えば良いはずであって、仇敵の子供に転生してその愛情を手玉に取る必要は無い。その不自然さを補う為か、『玄怪録』『党氏女』では被害者王蘭が天涯孤独である（つまり代わりに復讐してくれる者がいない）ことをわざわざ断り、『夷堅志』『王蘭玉童』では被害者王蘭の性格について吝嗇であることを強調し、命だけでなく金も取り返さなければならぬことの理由付けとしている。しかし、前世に金を奪われただけでなく友情をも裏切られたことにすれば、金銭面だけでなく愛情面においても復讐するという展開が自然に感じられる。

「党氏女」では、作者はおそらく殺された商人と子を亡くした夫婦のどちらにもシンパシーを感じておらず、その関心は奇想天外な復讐方法の顛末を伝えることにあるのではないかと思われる。一方宋から清にかけての筆記小説では、子供を無くした親の悲しみの描写にウェイトが置かれるようになり、読者がむしろ復讐される側に感情移入するようになっていく。これは仏教色を強めたというよりは、子供を亡くした親にたっぷり同情させておいてから討債鬼が正体を表した方が、最後の恐怖感が大きくなるからであろう。

さらに「党氏女」系説話の被害者が、皆現世で犯した罪によって討債鬼の子を得るのに対して、宋・清の鬼討債説話ではしばしば記憶に無い前世の罪によって不幸に陥るのである。現世の罪によって不幸になる者は、他人の金を奪って富裕になった経験のないほとんどの読者の同情をひきにくい。だが、前世での罪は自分も実は背負っているかもしれないものであり、それを「色々な意味で手のかかる息子を背負い込む」という世上にありふれた厄介事によって償わねばならないという物語は、読者に「明日は我が身」の感を覚えさせることが出来るだろう。

2-1 「阿足師」型説話について

唐代の鬼討債説話にはもう一つ、『宋高僧伝』巻十九「唐虢州閿郷阿足師伝」の原話となった『集異記』佚文「阿足

「師」の系統のものがある。これらの作品では必ずしも金銭のやり取りは描かれず、むしろ仇敵の子供に転生して復讐をしようとするという部分にウエイトが置かれており、正確に言えば鬼討債説話とは言えない。しかし「阿足師」は、『日本霊異記』所収の類話に関する研究⁽¹⁷⁾において、つとに鬼討債説話との関連が指摘されているものであり、後述するように、中国においても同種の話は広く鬼討債説話として認識されてきた。まずは、『集異記』所収の「阿足師」を紹介する。

阿足師者、莫知其所来、形質痴濁、神情不慧、時有所言、靡不先覺。居雖無定、多寓闕鄉。憧憧往来、爭路礼謁。山岳檀施、曾不顧瞻。人或憂或疾、獲其指南者、其驗神速。時陝州有富室張臻者、財積鉅万、止有一男。年可十七、生而愚騃、既孿手足、復憎語言、惟嗜飲食、口如溪壑。父母鍾愛、尽力事之、迎医求藥。不遠千里。十數年後、家業殆尽。或有謂曰「阿足賢聖、見世諸仏、何不投告、希其痊除。」臻与其妻、来抵闕鄉、叩頭投泪、求其拯濟。阿足久之謂臻曰「汝冤未散、尚須十年。慙汝勤虔、為汝除去。」即令選日、於河上致齋、広召衆多、同觀度脫。仍令齋致其男、亦赴道場。時衆謂神通、而觀者如堵。跂竦之際、阿足則指壯力者三四人、扶拽其人、投之河流。臻泣拳会之人、莫測其為。阿足顧謂臻曰「為汝除災矣。」久之、其子忽於下流十數步外、立於水面。執手於其父母曰「与汝冤仇、宿世緣業。賴逢聖者、遽此解揮。恍或不然、未有畢日。」挺身高呼、都不愚痴。須臾沈水、不知所適。(阿足師は何処からやってきたのかは分からない。愚者のように見えたが、口をきくとそれは未来を予言する言葉だった。居場所はまだなかったが、大概闕郷に住み、庶民から慕われていた。時に陝州に富豪の張臻という者が居た。大変な財産を持っていたが、子供は男児一人しかなかった。その子は手足が引き攣り、言葉がはつきりせず、その上大食らいだったが、父母は溺愛していた。人の勧めで張臻は阿足師のもとを訪ね、自分たち父子を救ってくれるように頼んだ。阿足師はこの子供が前世の仇敵であることを見抜き、河の辺で潔斎してから子供を急流に投げ込んだ。子供は水面にすつくと立ち上がり、はつきりとした

言葉で、聖人に会ったためにここで復讐を止めなければならないことを告げ、水中に没した。(訳文は梗概のみ)

『宋高僧伝』も主要部はほぼ同じ内容であるが、最後に阿足師の活躍したおおよその年代が記載されている。それによれば奇跡を起こしたのは大暦・建中年間(七六六〜七八四)のことであり、貞元十二年(七九六)に諡を賜っているという。李劍国の考証によれば、⁽¹⁸⁾『集異記』は更に後の長慶四年(八二四)頃成立したとされている。なお、阿足師の登場するこの説話は、民国期に編まれた『新修閩郷県志』⁽¹⁹⁾にも収録されている。

『阿足師』では、親を苦しめる手段として、医薬や飲食のために浪費させるといことが強調されているが、「党氏女」のように前世で財を奪われたというような説明は無く、討債しているのかどうかいまひとつ明白ではない。また、「阿足師」では、親に取り付いた前世の仇敵は、再度転生することなく直接正体を名乗っている。「党氏女」に比べて全体に古めかしい印象を受ける話ではあるが、この点は宋代の鬼討債説話に一步近い。

おそらく『集異記』と大体同時代に書写された敦煌写本(パリ国立図書館蔵ベリオ本三九一六)所収の『仏頂心陀羅尼經』下巻第三則にも、類似する説話が収められている。その概略は以下のとおりである。

昔一人の婦人が居て、いつも『仏頂心陀羅尼經』を供養していた。この婦人は三生以前に他人を毒殺していた。殺された者は復讐のためにこの婦人の子供に転生して胎内に入り、難産の苦しみを味わわせ、生まれてからは幼時のうちに死んだ。このようなことが二回繰り返され、そのたびに母親は歎き悲しんで子供の遺体を水中に捨てた。三度目に子供が死んだ時、水辺で母親が泣いていると、僧に化した観音菩薩が現れ、これが婦人の子供ではなく前世の敵であることを教えた。また、『仏頂心陀羅尼經』の功德によってこの敵は夫人の殺害を遂げることができなくなったことも教えた。僧が一拍すると水に捨てた子供が夜叉の形になって水中に立ち、復讐のために子供となって婦人に近づいたこと、『仏

『頂心陀羅尼經』の功德で復讐を果たせなかったこと、観音のおかげを蒙って成仏することを述べ、水中に没した。婦人はその後益々篤く『仏頂心陀羅尼經』を信仰し、その功德で九十七歳まで生きて秦国の男子に転生した。

この『仏頂心陀羅尼經』は、各代の大蔵經には収録されておらず、偽經（あたかもインドで成立したような体裁をとりながら、相当する梵語やパーリ語の原典を持たないもの）といわれる類の經典であり、仏典という体裁をとっているものの、呪符を書いて服用することを薦めるなど、仏教から逸脱した思想も多く語られている。また、下巻は四つの靈驗故事からなっているが、最後の一つは明らかに中国が舞台となっている。従来の研究では敦煌で成立し、宋代以降中国本土にもたらされたとしてきたが、朱長文『墨池篇』や鄭樵『通志』が、唐代中国本土で刻された同經の碑文の存在を記録していることから、唐代の中国本土にも既に存在していたと考えられる。⁽²⁴⁾

後小路薫氏が、『宋高僧傳』の阿足師伝との関係を指摘した『日本靈異記』中巻第三十縁「行基大徳、携子女人視過去怨、令投淵示異表縁」は、説法を聞きにきた女の子供が、前世で貸した物の価を取り返そうとして転生して来た者であることを行基が見抜き、子供を淵に捨てさせる、というものである。『日本靈異記』は、薬師寺沙門を名乗る私度僧景戒の手になる仏教説話集であり、作品内にあらわれる一番新しい年号が弘仁十三年（八三二）であることから、この時期以降に最終的に完成したものとされている。⁽²⁵⁾ よって『集異記』とほぼ同時代の作品であると推測できる。しかし、ここには「貸した物を返してくれないから祟る」という「阿足師」にはない要素が付け加わっているのが注目すべき点である。ただし金銭ではなく物品であるのは、当時の日本における貨幣経済の浸透の度合いがまだ低かったからかもしれない。

さて、この三話を比べると、「親が子によって様々な苦痛を味わう」「子供を伴って河の辺で救済者と対する」「子供を河の中に投げ捨てる」と、前世の仇という正体をあらわし、水中に立つ」という共通した要素が含まれていることが分

かる。子供を淵に投げ捨てるというのは、かなり異様な行動である。「阿足師」や『日本靈異記』ではひとえに高僧のお告げに従って子供を水に投げ入れるのに対し、『仏頂心陀羅尼經』では愛児の亡骸を「水に捨てて」おり、水葬という習慣によってその行為を行っているものと思われる。⁽²⁷⁾ また、「阿足師」では討債の件があいまいであり、『日本靈異記』では貸した物の取りたてが強調されるのに対して、『仏頂心陀羅尼經』では子が親を苦しめる手段としては難産などによつて肉体的な苦痛を与えることに重点が置かれている。このことは、この「阿足師」型説話が討債鬼説話にも、そうでない方向にも発展しうるものであることを示している。

なお、宋から清にかけての鬼討債説話はほとんど父子関係を扱っているのに対し、『仏頂心陀羅尼經』や『日本靈異記』の場合、母子関係を強調しているのも特徴的である。

『集異記』と『仏頂心陀羅尼經』については、どちらが先に成立したか今のところ結論は出ない。しかし『集異記』および『仏頂心陀羅尼經』の作者が『日本靈異記』を読んだ可能性は無いに等しいであろうから、『日本靈異記』は、これらの作品か、又は未発見の「阿足師」型説話をもとに作られたのであろう。

2-2 「阿足師」型説話の伝播

「阿足師」型説話は、「党氏女」型説話と違って、筆記小説の世界では次々と新しいバリエーションを生み出すことは無かつたようであり、『宋高僧伝』以降に書かれた類作はいまのところ見られない。しかし、「阿足師」型説話を多くの人が読んだり、聴いたりしたであろうことは、この説話があたかも日本のものであるかのように装いつつ『日本靈異記』に収められていることや、この話を収めた『仏頂心陀羅尼經』の写本が漢族居住地だけでなく契丹・女真・党項・ウイグル・朝鮮・日本に残されていることから知ることが出来る。⁽²⁸⁾

また、金銭のやり取りが描かれていないにもかかわらず『仏頂心陀羅尼經』所収の説話が各時代の人々から鬼討債説

話として認識されていたことは、一九五九年に湖南省で発掘された北宋期の『仏頂心陀羅尼經』奥書や、『金瓶梅』の引用箇所から知ることが出来る。まず、『仏頂心陀羅尼經』奥書を見ると、

虔州贛県孝仁坊清信弟子任士衡及妻千氏三娘、同発丹心印造『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』五百卷、意者伏為長養男女、多有□寿、切慮夫妻年命□□、又恐前世今生惡業債主冤家是致、長養男女无成、頻多災害、所有冤家仗此『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』各相解釈、冤家債主（このあとは紙の汚損のため解説不能。□は判字不能）
大宋嘉祐八年歲次癸卯正月一日謹題

（虔州贛県孝仁坊清信弟子任士衡と妻千氏三娘が同じく丹心を発して『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』五百卷を印刷いたします。思うところは、息子や娘が無事成長し、多く□寿をさずかること、また夫妻の年命の□□を切に願ひ、前世や今生で作った惡業の債主・冤家がやってきて、息子や娘が育てても成長せず、しきりに災いに見舞われることを恐れております。

あらゆる冤家は、この『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』にすげれば逃れることが出来、冤家債主は…。
大宋嘉祐八年（一〇六三）歲次癸卯正月一日謹題

とあり、『佛頂心陀羅尼經』の大量印刷が前世や今生の債主冤家からの復讐を防ぐことが出来るとされていることがわかる。『佛頂心陀羅尼經』本文のうち「債主の復讐」と何らかの関係がある箇所はこの下巻第三則の故事しかなく、このことからこの奥書を作った人物（依頼者や印刷業者）がこの母子の物語を「鬼討債」であると考えていたことが分かる。また、經典の大量印刷の功德によつて前世の債主の追及を避けようという発想が存在したということから、当時鬼討債が既に小説の中だけの出来事ではなく、実際に自分の身に降りかかり得る出来事であると考えられていたこ

とも窺える。この刻本が印刷された北宋中期は、大まかに言って『太平広記』（九七八）と『夷堅志』（作者洪邁の没年は一二〇二）の成立年代の中間にあたり、「党氏女」型鬼討債説話と後世の完成した鬼討債説話が混在していた時期にあたりと思われる。

また、『金瓶梅』には、あたかもこのような版本が印刷される現場をとらえたかのような場面がある。第五十七回（30）に『仏頂心陀羅尼經』が登場する経緯は下のとおりである。

もと寺の門前の餅屋のおかみだった薛姑子は西門慶の家に入り込み、彼の愛児官哥兒ためになるからと西門慶に勧めて『陀羅尼經』（読み進んでいくうちに『仏頂心陀羅尼經』であることが分かる）の写経をさせる。つまり、彼女が口を利いて西門慶と經の印刷屋（經鋪）を周旋し、印刷した經を「嶽廟」（泰山を祭る廟）に奉納させるのである。ところが写経が出来上がる頃に、官哥兒は猫の雪獅子におどかされて死んでしまう。すると薛姑子は『仏頂心陀羅尼經』下巻第三則を引き、官哥兒は実は李瓶兒の前世の敵だったかも知れず、經の功德で討債鬼だった官哥兒が去ったのだと以下のように言いくるのである。

「今你這兒子、必是宿世冤家、託來你陰下化目化財、要惱害你身。為緣你供養修持、捨了此經一千五百卷、有此功行、他投害你不得、今此離身……（あなたのこのお子さんは、きつと前世の仇敵で、あなたのもとに生まれ変わって財産を使い果たし、あなたの身をも苦しめるつもりだったのでしょう。あなたが供養修持して、この經千五百卷を喜捨したので、この功德があり、彼もあなたを害することが出来ず、今ここで離れたのでしょ……）」

『仏頂心陀羅尼經』所収の説話には借金取立ての要素はないにもかかわらず、死んだ官哥兒を討債鬼と見做すような解釈がなされているのは明らかである。このことから、薛姑子ばかりでなくこの物語の読者がこの説話を鬼討債説話と

して認識していることを知ることが出来る。また、これが現実の信仰の有様を写し出していることは、夫婦が連名で子女の幸福を祈り、經典を大量に印刷するという点が、先に挙げた版本の奥書にある状況とほとんど一致することから推測することが出来る。

「阿足師」型説話は、薛姑子のような人々によって語られ、筆記小説を読まない人々——文字を読めない人々や、ともすると非中国語圏の人々——の間にも鬼討債説話を広げていく下地となり、筆記小説の鬼討債をフォークロアの領域に拡大することを助けたのではないだろうか。

3 「党氏女」と「阿足師」の比較 —— 復讐に対するスタンスの違い ——

「党氏女」と「阿足師」の二つの物語の共通点は、「仇敵の子供に転生して復讐する」という点である。しかし、この復讐劇をこれらの物語は違う視点から描いている。

まず「阿足師」の物語は、完全に「復讐される側」に感情移入するように作られている。復讐者は取り除くべき邪悪な存在であり、復讐を果たすことなく高僧によって済度され、復讐されるべき主人公は致命的な報いを受けない。読者がそのような虫の良い話の主人公にすんなりと同情出来るよう、復讐者の前世におけるトラブルについてはいずれの場合も漠然としか描かれていない。

一方、「党氏女」系の物語の作者達は、復讐ということに対して強い関心を持っているようである。復讐者の前世におけるトラブルは克明に描写され、理不尽な動機による殺人を知る読者は、「復讐される側」がいかなる不幸に襲われても完全に同情する訳にはいなくなる。しかし一方先に挙げた『夷堅志』『王蘭玉童』のように、前世の復讐者の性格については、欠点を指摘する場合もあり（つまり殺される王蘭の性格を「性斬豈多疑」と描写するというようなこと）、「党氏女」や「盧叔倫女」においても、復讐のためだけに何度も転生を繰り返し、他人のふりをしながら、そう遠くないとこ

ろに居てかつての殺害者を監視するという陰険さには、前世において不当な行為があったとは言え、辟易させられるところがある。つまり、「党氏女」においては、どちらかの登場人物に同情することではなく、復讐という出来事の(31)一部始終を描くことが作者の関心事になっているのではないかと思われる。

ところで、多賀浪砂の『干宝『搜神記』の研究』(32)では、『搜神記』中の作品とそれになった漢訳仏典中の説話との比較が行われている。多賀によると、仏典は「復讐」ということを描きながらも、悪人をも許すことによって善人を導くことや、怨念の消滅を目指し、教訓としては人から恨まれる悪因縁を作らないことを提唱するが、六朝志怪の登場人物たちはあくまでも復讐の完遂を目指しているという。つまり、仏教説話では自分が誰かによって害を加えられるのは、全て前世の因縁であるから、「復讐」が成り立たず、説話の主眼はむしろ「因果を解きほぐす」ことに置かれている。多賀は例として『六度集経』(大正大藏経五・一五二)所収の話と、『搜神記』卷十一所収の「三王墓(干将莫邪の話)」とを比較し、「三王墓」が、「賞金の懸けられている首」、「父の敵を討とうとする息子」というモチーフを『六度集経』から取り込みながら、息子の復讐は完遂され、敵味方の和解がまったく見られないことに注目している。

多賀の指摘したことは、「党氏女」系説話と「阿足師」系説話のスタンスの違いにも当てはまるだろう。「党氏女」は、仏教の与えた輪廻という道具立てを使用しながらも仏教の提唱する「ゆるす」という思想については取り入れていない。一方「阿足師」は高僧が一段高いところから仇敵同志を調停するという、仏教宣伝色の濃い作品である。それだけに「阿足師」は仏教的な救済よりは物語そのものの面白さに関心を持つような人々を引きつけることが出来ず、少なくとも筆記小説の領域ではこの系統の話があまり増殖しないという結果になったのだろう。

このような復讐観は、輪廻の理解に対しても影響を及ぼしていることが出来る。森三樹三郎は、輪廻という思想が、中国ではむしろ現世の徳行が来世で報われるという救いをもたらしたことを指摘している。(33)大蔵経にある經典に起源を持ち、中国でも流行した、借金を踏み倒した人間が家畜に転生して償債する「畜類償債譚」(34)ではまだしも、輪廻

が（被害者のかわりに）復讐を遂げてくれる、というひかえめな発想であった。一方「党氏女」では復讐するのは被害者本人であり、輪廻は手段に過ぎない。インドでは逃れるべき恐ろしいものとして認識されていた輪廻は、ここにいたって復讐者の愛用する単なる道具となったのである。

まとめ

中唐期は、税制に大きな変化があった時期である。それまでの租庸調制（基本的に穀物・布帛・労働によって納税する）から安史の乱直後の混乱期には戸税・青苗・地頭錢などの貨幣による徴税が大々的に行われるようになった。また政府による塩の専売も復活された。そして七八〇年には両税法（貨幣価値に換算しての納税）に移行した。実際には貨幣の流通量は決して多くなく、穀物や布帛による支払いや納税が継続していたが、貨幣が価値の基準として不動の地位を得ることとなり、また都市民だけでなく農民も貨幣経済に巻き込まれることになった。⁽³⁵⁾

奪われた金額をびったり取り返すことに執念を燃やす討債鬼の物語は、このような時代を背景にして成長したものである。この時期の鬼討債説話は、『玄怪録』所収の「党氏女」を代表とする説話と『集異記』所収の「阿足師」を表とする説話に分けることが出来る。「党氏女」系統の作品の担い手は牛僧孺をはじめとする筆記小説の作者・読者層であった。彼等は輪廻という仏教的な「装置」を作品に取り込んだが、復讐の連鎖を断ち切ろうという仏教の精神には距離を置き、人間は復讐を欲するものであり、復讐するものであるという考えのもとに作品を享受した。一方、「阿足師」系統の説話は、子供に転生してまでも復讐を果たそうとする執着を仏教の力で断ち切るものであり、仏教文学がその母体となったと考えられる。両者の内、宋から清までのスタンダードな鬼討債説話のものになったのは中国的な復讐観を体現した「党氏女」系説話である。宋代以降、鬼討債説話はより簡素になることによつて（転生の回数が一回減少し、子供自身が前世の正体を告白するようになる）、「本当にあつた話を素人が語っているような怖さ」を演出するようになって

いった。また、「党氏女」系では通りすがりの犯罪が怨恨を生むことになっていたのが、宋代以降は信頼への裏切りが契機とされるようになり、愛情を踏みにじりながら金を搾り取っていくという復讐方法により相應しい動機が定まっていた。

「阿足師」系は、「党氏女」のように豊富なバリエーションを生み出していくことは無かったが、宗教的な口承文芸に乗って、鬼討債が非識字層にも広く語られるために一役買ったことだろう。また、「阿足師」型の鬼討債説話を含む『仏頂心陀羅尼經』は、討債鬼が家庭に入り込むことを防ぐ呪術の道具として使用された。このような事情も鬼討債という現象が文学の世界から民俗の世界へ進出していくことを助けた。このように、文学と巷談が互いに影響しあいながら、鬼討債説話をはぐくんできていったのである。

しかし、ここまででまだ説明されていないことは多い。一つは、「党氏女」以前の鬼討債説話の状況である。鬼討債説話は、輪廻という仏教的な道具立てと、復讐への興味という仏教からは否定されるべき傾向を兼ね備えており、その起源を説明するためには今後も仏教文学と世俗文学の両方の分野に目配りしていく必要がある。

また、鬼討債説話には明らかに流行の波がある。宋代・清代の筆記小説では、たやすくいくつもの鬼討債説話を発見することが出来るが、元代・明代については作例が少ない。このような流行の波を作り出す要因が何であるのかはまだ不明である。

日本への鬼討債説話の伝播は、『日本霊異記』に始まるが、中世まではあまり定着しなかったようである。江戸時代に入ると筆記小説に中国の翻案ものが散見されるようになる一方、金を奪われた者が奇形の子供や油を舐める奇癖を持つ子に転生して親の旧悪を暴くという改変も現れる。⁽³⁶⁾ この改変は、民話「こんな晩」⁽³⁷⁾や古典落語「もう半分」⁽³⁸⁾に受け継がれる。⁽³⁹⁾ また、夏目漱石の『夢十夜』⁽⁴⁰⁾第三夜も鬼討債の日本的改変の中に入ることが出来るかも知れない。中国の鬼討債説話の場合、「金額が確かに合っている」ということが不気味さを生むポイントになっているが、日本の場合は先

に挙げた感覚的な怖さの他に、子供の容貌や言動によって罪が（特に世間に対して）告発されることを恐れる気持が強いといえるだろう。

鬼討債説話の漢民族以外への伝播も、日本の場合と同様、今後調査しなければならない課題である。少なくとも『仏頂心陀羅尼経』を受容した契丹・女真・党頂・ウイグル・朝鮮の各民族は、『阿足師』型に属する鬼討債説話に触れている訳だが、さらに各民族独自に鬼討債説話を創造していったのかどうかは今後検証の必要がある。また、二十世紀に入ってから民話研究で鬼討債説話の存在が確認されている雲南省では、却って『仏頂心陀羅尼経』が流行した形跡が見られないという点も興味深い。今後の課題としたい。

注

(1) 澤田瑞穂『鬼趣談義』（初刊一九七七、国書刊行会。一九九〇平河出版社より修訂版刊行。現在は修訂版が中公文庫に収録されている。）

(2) 永尾龍造『支那民俗誌』（支那民俗誌刊行会、一九四二）。

(3) 文彦生『中国鬼話』（上海文芸出版社、一九九二）。

(4) 『夷堅志』（宋・洪邁）「陳小八子債」、徐輝仲、「睽車志」（宋・郭象）「平江陸大郎」、「聊齋志異」四十下、「灰大王」（北新書局 民間故事叢書一 一九三二）所収「討債鬼」は澤田瑞穂前掲書にて紹介。

(5) 中国古典文学大系四二『閱微草堂筆記 子不語』（前野直彬 平凡社 一九七二）に訳がある。

(6) 文彦生 注三前掲書。

(7) 永尾龍造 注二前掲書。

(8) 上海『苦竹』月刊第二期（一九四四）初出。

(9) 作品集『凌遲』（天地圖書 二〇〇一）所収。

(10) 唐・余知古撰。『新唐書』卷五八「藝文志」二に「余知古渚宮旧事十卷文宗時人」とある。文宗在位は八二七～八四一。この

話は澤田瑞穂前掲書にて紹介されているが、後世の鬼討債説話との比較論考は無い。

- (11) 「党氏女」の存在は元東京大学大学院修士課程に在籍の梶村永さんよりご教示を受けた。
- (12) 程毅中点校『玄怪録 続玄怪録』（中華書局出版 一九八二）。
- (13) 李劍国『唐五代志怪传奇叙録』（南開大学出版社 一九九三）下卷六一四頁。
- (14) 李劍国前掲書（注13）によれば、大中（八四七～八五九）頃の盧子の撰。
- (15) この「呉雲郎」と「周翁父子」の二作品については、管見の限り先行研究で言及したものは無い。
- (16) たとえば、中唐の小説白行簡『三夢記』は、唐代の後継作『河東記』『独孤遐叔』『太平広記』卷二八二、や『纂異録』『張生』『太平広記』卷二八二、において、すでに描写が詳細になり、登場人物も増しているが、更に下って『聊齋志異』『鳳陽士人』になると物語の構成自体がより複雑なものになっている。（『三夢記』の後世への影響については李劍国前掲書（注13））。
- (17) 『元禄文学を学ぶ人のために』（井上敏幸・上野洋三・西田耕三編 世界思想社 二〇〇二）第五章 説話文学 近世説話の位相——鬼索債譚をめぐって——後小路薫 百十六～百十九頁。
- (18) 李劍国前掲書（注13）上卷五〇九頁。
- (19) 黄覺修等纂 一九三二 卷二十四・「仙釈」。
- (20) 泗州普光寺の銭を借りて任地に赴任した役人が、取立てについて来た寺の沙弥を殺害しようとするが、『仏頂心陀羅尼經』の功德で阻まれる、というもの。『日本霊異記』下卷第四縁、『青瑣高議』後集卷四「陳叔文」は類話。詳しくは拙稿『偽経（仏頂心陀羅尼經）の研究』（『新文学』大象出版社 二〇〇六年刊行予定）。
- (21) 鄭阿財『敦煌写本『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』研究』（『敦煌学』二三輯 二〇〇一）。
- (22) 卷六碑刻二 芸文。
- (23) 卷七十三・金石一 唐下。
- (24) 前掲拙稿（注20）参照。
- (25) 小学館 完訳日本の古典第八巻『日本霊異記』（一九八九）解説（中田祝夫）による。
- (26) 『日本霊異記』所収の説話については、障害のある子供を水に捨てる風習や、子供を水神の犠牲にする風習を反映するという

説も出されている（井上正一「不具の子を捨てる民俗」（『日本歴史』二八三号 一九七二）。これに加え、「阿足師」についても、中国で、主に女兒を河などに棄てる「溺女」の風習が反映しているのではないかという説がある（長谷川兼太郎『満蒙鬼話』（長崎書店 一九四一）「鬼三題」中「張家の鬼」項）。

(27) 外国のものとしての水葬という習慣の記述は、『大唐西域記』の「印度総述」および『冊府元龜』卷九六一・外臣部六・土風第三の天竺国の条にあり、正史では『南史』扶南国条で水葬が行われていたことが記されている。なお、『冊府元龜』の同章に、吐蕃国（チベット）の条もあるが、これによると現在のチベットと違い吐蕃国には墓を作る習慣があり、鳥葬や水葬の風習はまだ記載されていない。

(28) 鄭阿財前掲論文。前掲拙稿など。

(29) 『文物』（一九五九年第一〇期）八七頁写真。

(30) 『金瓶梅』における『仏頂心陀羅尼經』引用は、澤田瑞穂の『増補 宝巻の研究』（国書刊行会 一九七五）中第三部 宝巻叢考『金瓶梅詞話』所引の宝巻について、及び「弘陽教試探」の章で指摘されている。

(31) 多賀浪砂『干宝『搜神記』の研究』（近代文芸社 一九九四）十三頁～十八頁。

(32) 森三樹三郎『中国思想史』下（第三文明社 一九七八）二八四～七頁。

(33) 『出曜經』（大正大藏經ノ.二二二）卷三。

(34) 澤田瑞穂『畜類償債譚』（『仏教と中国文学』澤田瑞穂 国書刊行会 一九七五 所収）に詳しい。

(35) 布目潮風・栗原益男『中国の歴史四・隋唐帝国』（講談社 一九七四）。

(36) 後小路薫 前掲論文（注6） 百十六～百十九頁。

(37) 『本朝二十不孝』卷三「当社の案内申す程をかし」（一六八六）、『西鶴織留』卷一の二「品玉とる種の松茸」の入話（遺作。一六九三）。

(38) 「たとえば、ある泥棒夫婦がいて、六部を殺して金をまきあげる。後、夫婦には子供が生まれるが、ある夜、女房が子供に小便をさせていると、子供が「六部を殺したような晩だ」という、という話。」（稲田浩二ほか編『日本昔話事典』（株式会社弘文堂 一九七七 三六八頁）日本全国に広く分布。

(39) 居酒屋の夫婦が客である老人の置き忘れの大金を横領し、老人は自殺する。その金で豊かになった夫婦の間に、老人そっくり

りの赤子が生まれ、妻は驚死する。赤子のために雇った乳母が次々辞めるので、夫が夜中に様子を見ると、赤子は行灯の油を舐めている。そして老人の口癖そのままに「もう半分」という。

延広真治編『落語の観賞二〇一』（株式会社新書館 二〇〇二）二〇九頁「もう半分」項。

(40) 背中に負った盲目の我が子から、「お前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」と告げられるというもの。
朝日新聞初出 一九〇八。